

滞在型研究員報告書（様式2）

（2008年9月策定）

国立天文台滞在型研究員の方には期間中の成果について報告をしていただくことになっております。このフォームに記していただき期間終了2週間以内に国立天文台研究支援係にご提出ください。なおこの報告書は研究成果の論文掲載前でも研究交流委員会のweb上に公開いたしますので、研究内容の詳細について記入していただく必要はありません。この研究の成果を学術誌等で発表するときはその旨を謝辞に記載してください。

所属 國學院大學 大学院特別研究員

氏名 渡辺 瑞穂子

受け入れ 氏名：相馬 充

滞在期間 2011年8月17日～2011年8月31日

I. 滞在型研究員として国立天文台滞在中に行った活動について簡単にお書きください。

国立天文台の相馬充、上田暁俊、谷川清隆の三氏および國學院大學大学院生の落合敦子氏と五名で午前十時から午後五時まで計十一回の合宿を行った。宋書に見られる暦法のうち、元嘉暦（445～509）を原文から読み解き、日月蝕推算法についてはその基盤となる前法の景初暦に遡って読解を行った。景初暦（237～265）では、太陽・月は等速として日の干支、朔望を算出する。日月蝕の推算には月運動が非等速であることを考慮して補正を加えることがわかった。元嘉暦では、さらに非等速性を補間する。以上の理解を踏まえて、『日本書紀』の七世紀の暦日と天文記事の検証を行った。

II. 今回滞在型研究員として得られた成果について簡単にお書きください。

- (1) 宋書の元嘉暦と景初暦について、訓読文と訳文を作成したこと。元嘉暦には邦訳がない。宝永三年翻刻本（志村三左衛門楨幹）による句読点があるが、暦を理解しないことによる読み違いがある。それを正した。これと訳文を併せて、今後日本の元嘉暦研究の基盤として役立つものと考えられる。
- (2) 景初暦と元嘉暦で、天寿国繡帳にみられる推古朝の年号干支の相違問題を推算・検討したこと。元嘉暦での推算から新たな成果につながる感触が得られた。この年号干支の問題は儀鳳暦でも推算する必要があるため、最終結果には至っていない。

III. この制度についてなにか御意見がありましたら、なんでも記入ください。

夏期休暇を利用して集中討議したことで暦法への理解が進展しました。自由に意見交換をしながら共同作業をして、短期間で研究が発展したと思います。宿泊施設を利用しない滞在型研究が、二ヶ月間まで延長して出来るようになればより素晴らしいと思いました。